

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 渡邊英理

渡邊英理氏の博士（学術）の学位請求論文「路地と文学——中上健次の文学における遍在化する路地、および歴史の中で蠢く者たちをめぐる文化研究」は、中上健次の文学テキストが、「路地」という時空をどのように表象したのかについての分析を軸としながら、同時代の他の作家の小説を比較対照することによって、高度経済成長期以降の日本の文学と文化の在り方を明らかにしている。

「路地」は一方で、中上の故郷和歌山県新宮の、被差別部落の記憶が込められた固有の時空であり、他方で日本と世界で生起する出来事を歴史的に捉え返す時空としても機能しているという認識が本論文の前提となっている。

この理論的前提をふまえながら、本論文では、「暴力」「歴史」「地図」「芸能」という四つの主題を設定し、それぞれの主題との関連で、同時代の他の作家の小説との動的なかわりの中で、中上の小説表現を分析している。

第一部「「激情」から「路地」へ」では、「路地」がそれとの関係で描き出される「権力」という構造的暴力の問題を抽出し、フランツ・ファノンの「暴力の哲学」を参照項としながら、中上健次の『十九歳の地図』から『熊野集』の「石橋」などの小説テキストを分析している。同時に村上春樹『一九七三年のピンボール』と、干刈あがた『樹下の家族』を、対抗的暴力という観点から関連づけてとらえ直し、中上の小説の主題が文化闘争へと移行していく過程を跡づけている。

第二部「「路地」解体の経験」では、歴史認識の問題に焦点があてられている。中上の短編集『熊野集』を、『今昔物語』との関連において位置づけ、『古事記』や『日本書紀』といった「正史」に対抗する「稗史」の試みとして捉え直している。古代から現代にいたる支配と被支配、差別と被差別の系譜が辿られていきながら、戦後沖縄文学の崎山多美の小説と対照されることによって、規範的な支配する側の文学に、対抗する周縁の文学の可能性が明らかにされていく。

崎山の小説において表現される、もっとも周縁の世界を生きる女たちの声の分析をとおして、支配的な力関係を転倒する文学の可能性が見出されている。

第三部「空き地と地図の想像力」では、侵略や支配の道具としての地図の表象の分析を中心にしながら、中上の小説内部における空間的表象の独自性を、「空き地」の中でとらえ直している。「空き地」は、支配の及ばない場所であり、支配と対抗する根拠ともなり、権力に対峙することのできる空間の喩であることが証明されていく。

中上の「地図」と「空き地」との共振性において、干刈あがたの『予習時間』と『ホームパーティ』が位置づけられ、大人の社会から逃れる避難所としての「空き地」が抽出されている。

第四部「芸能の語りと甦り」においては、中上健次の芸能についてのテキストが分析されている。「語り物文芸」としてある古代以来の「歌」を中心とした声の芸能の系譜についての中上の関心を跡づけながら、都はるみ論に集中的にあらわれる「移動」の主題を前景化し、非定住の文化の歴史的軌跡が記述されている。また芸能に従事する人々が、古くから被差別の扱いを受けてきた、日本の天皇制の固有の差別観にも言及しながら、「路地」から生まれ、そこに根づくのではなく「移動」しつづける芸能の声と言葉について論じられていた。

渡邊英理氏の当該論文は、中上健次『熊野集』を中心とする諸テキストを読み直しながら、言葉を文字と音声の両面から捉え直し、「路地」から生まれ、同時にその「路地」自体を創り出していく文学的想像力の在り方を明確にしている。とりわけ「路地」を消滅させ開発の対象とした、日本における新自由主義的なグローバル資本主義の暴力と、いかに抵抗し対抗していくかという問題意識を読み取りつづけようとした点において、中上健次論としても、その読解と分析は高い水準を示している。

また、村上春樹、干刈あがた、崎山多美など、同時代を生きた作家の小説テキストと、中上のそれとを比較対照して分析することによって、あらゆるモノとコトを、商品化し物象化していくグローバル資本主義の在り方を正確にとらえた一連の文学表現と表現者たちの系譜がこの論文によって明らかにされており、現代日本文学研究としてもきわめて重要な成果をあげている。

しかし、こうした一連の作家たちの小説表現が、必ずしも「路地」という概念が内包している関連性や類比性に収まり切らない側面があり、そのためにそれぞれの部における、中上健次の小説の分析よりも、他の作家の、小説に対する分析の方が説得力を持ってしまうという批判も、審査の中では出された。また相互の比較における強引さについての指摘もなされた。また天皇をめぐる、熊野と沖縄という地理的關係、演歌と芸能をめぐる文化的關係、ジェンダーとセクシュアリティの倒錯性の問題などについては、折口信夫の「国文学研究」をより精緻にふまえるべきであるという指摘もなされた。

しかし、こうした諸点があるにもかかわらず当該論文は、中上健次とその同時代を共にした村上春樹、干刈あがた、崎山多美の小説表現のそれぞれの達成を明確にし、都はるみも含めた、声と文字による言語表現者たちの協働的表現の文学的達成の成果を十分に明らかにしたことを評価する。

したがって本論文審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものとして認定する。